

硫黄島レポート

—硫黄島におけるジャンベの芸能伝承の視点から—

人文社会科学研究所
人間環境文化論専攻
1116860062 張悦

1. はじめに

今回の硫黄島実習は、島で様々な珍しい経験ができた。私は、文化人類学を勉強しており、研究テーマは中国残留孤児をめぐるアイデンティティについてのことである。島において様々な事情を体験したが、文化人類学の研究者として、やはり一番気になったのは、ジャンベを見学したことである。本稿では、三島村を代表する音楽・楽器としてのジャンベが硫黄島の独特な社会的背景のもとで、どう伝承されているのかについて、考察してみたいと思う。

2. 硫黄島の概況

鹿児島郡三島村は鹿児島港から南へ約 100 km、種子島、屋久島の西側に浮かぶ竹島、硫黄島、黒島の三つの島からなっており、その内硫黄島は面積 11.78km²、周囲 14.5 kmで、三島村の中心的な島である。また竹島は面積 4.18km²、周囲 9.7 km、黒島は面積 15.65km²、周囲 15.2 kmでいずれも小さな島である。これらの島々と鹿児島とは、平均して月に 8 回、約 4 日に 1 回の割合で出港する村営の定期船「みしま」によって結ばれているが、台風や時化のために欠航することもしばしばで、離島の不便さを痛感させられる。[眞鍋 1983]とはいえ、ここ硫黄島は今尚噴煙を上げる硫黄岳、俊寛の庵跡、安徳天皇の御陵、天然の温泉、格好の釣り場、島を彩る花、放し飼いの孔雀など訪島を誘うような資源を備えてはいる。

3. 硫黄島におけるジャンベについて

ジャンベは西アフリカの太鼓。英語では djembe、jembe、jenbe、yembe、sanbanyi などと綴り、読みはジンベ、ジェンベとも呼ぶ¹。

「ジャンベ」とはアフリカの打楽器のことで、主にマリンケ族やバンバラ族などギニア共和国を含む西アフリカの民族の伝統打楽器である。胴体は深く木をくりぬいて、主に山羊の皮が張られている片面太鼓である。胴の上部は丸みをおびて、中央がくびれたゴブレット形をしている。胴体には様々な模様、装飾がほどこしてあり、アフリカの代表的な民族楽器の「ジャンベ」としてだけでなく、インテリア装飾品に置かれていたり、民族家具や輸入雑貨店などでもよく目にしたりする楽器でもある。「ジャンベ」は深い低音とともに非常に高い音を出すことができ、また、1つの打面で3つの音を出せる打楽器で、気温が高く乾燥した環境で、よりよい音が出せるといわれている。「ジャンベ」は古くから人や自然とコミュニケーションをするための楽器として使われてきたと思われる。演奏も地域の祭りや儀式に使われるため、「ジャンベ」のリズムや共に踊られるダンスにもそれぞれ意味

¹ <https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャンベ> (7/14/2016) 定義引用。

があり、演奏される目的や場所、時刻も限定され楽曲も決まっている²。

平成6年から始まった西アフリカの世界的ジャンベ奏者「ママディ・ケイタ」氏との交流により伝授され、ジャンベは三島村を代表する音楽・楽器となった。ジャンベスクールは平成15年に開設され、アジアで初の西アフリカの伝統打楽器を習得できる施設として、国内のみならず海外からも注目を集めている。毎年夏に行うワークショップでは、ママディ・ケイタをはじめ世界からジャンベのリーダーが三島村に集まり、子どもたちに熱いアフリカンスピリットを伝えている。外国からも多数の方が参加する。

初めて触れる異国の太鼓に19人のみしまっ子たちは戸惑い、しかし陽気なリズムと、ママディたちの「うまく叩く必要はないんだよ。楽しんで叩くことができれば、聞いているみんなも幸せになれるんだよ」という言葉に励まされ、演奏する喜びを感じるようになっていた。練習を積んだ19人の子どもたちは、その夏、ママディと共に広島、岡山、奄美大島と演奏旅行に出かけ、拍手喝采を浴びた。こうして三島村とジャンベ、ママディ・ケイタは出会って以来、毎年の夏三島村にはママディと子どもたちの楽しい歌声とジャンベのリズムが響いている。これが縁で、みしまっ子たちはギニア共和国を訪問し、ヨーロッパ公演を行うなど、活躍の場を世界に広げている。さらに2004年には、ママディプロデュースの「みしまジャンベスクール」が開校し、アジア初のジャンベ講師も誕生した。2005年に開催された「愛・地球博」の「ギニア・ナショナルデー」では、ギニア共和国から訪れた奏者らとみしまっ子のセッションも行われ、会場を沸かせた。今や三島村は、ギニア共和国の伝統芸能を真摯に継承する国内唯一の村として、ギニア共和国との友好的な関係を築き上げている³。

4. 考察

しかし、真鍋によれば、硫黄島には小、中学校1校ずつが併置されていて三島小学校、三島中学校と称する。昭和57年9月1日現在で、(硫黄島)三島小学校の学級数3、児童数16人、教員数4人、中学校は学級数3、生徒数15人、教員数4人で、校長と教頭は小、中学校を兼務するので、小、中学校合わせて教員は10人となる。中学生はほとんど鹿児島市内の高等学校に進学すると述べている。[真鍋1983]今回の硫黄島実習にも、硫黄島小、中学校を訪問したことがあった。ある教員によると、今現在、硫黄島小、中学校の学生総数は僅か18人になった。これにより、時間の流れに伴って、硫黄島に通学する児童は正にますます少なくなったと言えよう。

硫黄島の状況は上述のとおりで、こうした社会的背景のもとで、ジャンベは元々西アフリカから伝授され、今日の硫黄島の地域シンボルとしてどう伝承されているのかを文化人類学において更に検討する必要があると考えられる。以下、二つの方面に注目し、検討したいと思う。

(1)ジャンベスクール

² <http://thomas-more.net/index.cgi?f=609&p=7&y=1> (7/14/2016) 記事参考。

³ <http://mishimamura.com/ech/348/> (7/14/2016) 記事参考。

ジャンベスクールの活動としては、住民のためのジャンベ教室、子供たちのジャンベ教室が毎週定期的に行われている。隣の黒島、竹島へは、ジャンベスクールの講師が毎月指導に出向いて指導している。観光客には、1回2時間程度の体験コースがある。その他、留学生を受け入れたり、夏期講習があったり、鹿児島の小中学校へ出張したりと、その活動は勢力的で頼もしい⁴。島の集落からは、昼間はこのジャンベのアップテンポな心地よい音源が、いつも鳴り響いている。ジャンベは今や硫黄島らしさという、なくてはならないものになっていると言えよう。

今回の硫黄島実習では、一番印象深いのは、ジャンベスクールの人たちがジャンベを演奏したり、踊ったりして我々を送迎することだ。彼らたちの情熱をすごく感じできた上で、彼らはジャンベのことに対する愛情に感動を受けた。その中に、ジャンベを勉強するために、仕事を辞め、わざわざ遠くから硫黄島に留学している学生たち（日本人）のことも聞いた。こういうような溢れる情熱こそがジャンベスクールが存在し続け、ジャンベが伝承される一因にもなったのだろう。

(2)お祭り

一方、従来から本当の伝承人である学生たちの人数が少なくなったとしても、本稿の前に述べたように、三島では毎年に行うお祭りでは、アジアの国々から多くの人々が本格的なジャンベを習得するためやってくる。地元の人ではないに関わらず、お祭りでの演奏することにより、人々がお互いに交流を通じて、ジャンベへの情熱をアピールしているのではないかと思われる。三島でのお祭りという形は、正にジャンベを世界範囲までに広げる方法だと考えられる。

以上、二つの面に注目してジャンベの伝承することを検討してみた。また、グローバル化に伴い、硫黄島における独特の芸能としてのジャンベは更に注目されていくだろうか考えられる。

参考文献

真鍋 隆彦 1983「民俗芸能の伝承とその社会的背景—三島村硫黄島太鼓踊りの事例」『経済学論集』21：167-179

引用サイト

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ジャンベ> (7/14/2016)

<http://thomas-more.net/index.cgi?f=609&p=7&y=1> (7/14/2016)

<http://mishimamura.com/ech/348/> (7/14/2016)

<http://shimanosanpo.com/churajima11/iou00/jyanbeschool/index.htm> (7/14/2016)

⁴ <http://shimanosanpo.com/churajima11/iou00/jyanbeschool/index.htm> 記事参考。